いま風　金曜日

震災5年

言葉のアルバム

被災地からも本音聞き出す

2011年3月11日。東日本大震災が発生した時、自治労北海道本部の書記長だった。直後から、被災地への支援物資搬送を陣頭で指揮した。

岩手県の担当者と連絡がついたのは、発生から約1週間後だった。「何か欲しいものはあるか」と聞くと、防寒着、長靴、肌着、子供用の下着などの答えが返ってきた。東北の春はまだ遠く、少しでも暖を取るための衣類が必要とされた。必要数を尋ねると、相手は言いよどんだ。何度も「こんな時だ。遠慮せず好きなだけ言ってくれ」と尋ね、ようやくそれぞれ何百という数が不足していることが分かった。

震災直後は被災地以外も物資は不足し、同本部と取引のある業者だけではまったく足りなかった。同本部内で「誰か呉服屋の親戚がいるやつはいないか」と呼びかけると、しばらくして「うちの息子が先日、呉服屋さんから嫁さんをもらったばかりだ」という役員が名乗り出た。呉服屋のつてをたどり、必要な数量をかき集めた。

日本最北の地・稚内にほど近い中川町で、組合活動をスタートさせた。1980年代当時、石炭をはじめとする道内の主要産業は、すでに衰退の道をたどり、道北では人口減少が始まっていた。北海道幌延町での原子力関連施設誘致への反対運動、国鉄の分割・民営化に伴う道内職員の異動問題などに取り組む中で、「しなやかに、したたかに」という身上が形成されていった。はちまきをまいてのぼりを立て、ストライキを叫ぶだけでは、地域を守ることはできない。目指したのは、しなやかで、したたかな運動だ。気さくな人柄で、地方自治体や中央省庁の幹部、保守系の政治家とも酒を酌み交わす。本音の議論を交わしながら、課題への対応策が見えてきたこともあった。

全国2725単組、約85万人が結集する自治労のトップに就任してからも、視線の先には常に「地域」がある。中央執行委員長として、公共サービスに従事する非正規職員による組合への加入促進に取り組む。正規職員だけに基盤を置いた従来の組合運動では、地域に貢献することはできないと考えているためだ。

「非正規労働問題への取り組みが不十分だ」という労組への批判も、意識の中にはある。19年8月までに10万人の加入を目指す。

震災の発生から5年。被災地の復興は道半ばで、震災前の暮らしを取り戻せていない被災者も多い。しなやかに、したたかに、難局を乗り越えてもらいたいと願っている。

（政治部　小野健太郎）

版画・大野隆司

「言葉のアルバム」さしえ原画などの「木版画展」が、東京・ＪＲ金町駅近くの葛飾区立中央図書館展示コーナーで30日まで開催中（24日は休館）。

にほんご

NIHONGO

川本　淳さん
自治労中央執行委員長

かわもと・あつし　1962年、北海道生まれ。81年に北海道中川町に就職。自治労道本部の書記長などを経て、2011年9月から中央本部書記次長、13年9月から同書記長、15年8月に同中央執行委員長に就任。日本労働組合総連合会（連合）の会長代行も務める。

撮影・工藤菜穂

方言探偵団

福島県　までい

篠崎　晃一

福島北部に位置する飯舘村。東日本大震災の原発事故で今なお、村民は避難生活を余儀なくされている。実は、この飯舘村では震災以前から、豊かな自然と人とのつながりを大切にした〝までいライフ（MADAY LIFE）〟を提唱し、村づくりに取り組んできていた。ゆったりした生活を提案する「スローライフ」の飯舘版だ。震災で中断せざるを得ない村民の悔しさは、想像に余りある。

「までい」とは、「手間ひまを惜しまず」「丁寧に」「じっくりと」といった意味を表す方言。東北を中心に使用地域は全国に散在している。

語源は、「まで」「まて」「までい」と言う地域もあることから、「両手」を意味する古語の「真手（まで）」に由来すると言われている。きちんと両手を使い、物事を雑に扱わないということから「丁寧に」との意味が生まれたわけだ。まさに生活の中で実感しながら意味を広げていったことになる。

被災者の皆さんがゆったりした暮らしを取り戻せるよう、両手で温かく包み込むような〝までいな〟復興支援が望まれる。

（東京女子大学教授）

画　成田輝昭

＊『にほんご』は毎週金曜掲載。次回（18日）の「言葉のアルバム」は、サントリーホールディングス社長の新浪剛史さんの予定です。